

〈論 文〉

始まりの国際関係論

—中国学派の批判的検討—

藤 木 剛 康*

I はじめに——背景と視角

近年，欧米中心の理論やその前提となる世界観の見直しをめざす国際的な研究プロジェクトとして，グローバル国際関係論（Global International Relations）の研究が活発に進められている。グローバル国際関係論は，非欧米地域の国家間関係の歴史的パターンをウェストファリア的国際システムと比較することにより，欧米中心の国際関係論を相対化して欧米と非欧米というステレオタイプな二分法を乗り越え，多様な構想やアクターからなるポスト欧米の世界秩序を展望しようとする取り組みである¹⁾。

グローバル国際関係理論の潮流の中でも最も活発に研究成果を発表しているのが中国学派の国際関係論である。中国の国際関係論学界は，すでに *The Chinese Journal of International Politics* や *China International Strategy Review* などの英文学術誌を定期的に刊行し，中国人だけではなく，欧米の論者も巻き込んだ活発な論争を展開しつつある。中国学派の目的は主に近代以前の中国史，とりわけ春秋・戦国時代の歴史や思想から中国独自の理論を構築し，欧米中心の国際関係理論や欧米諸国の対外政策を批判することにある。

こうした中国学派からの提起に対し，欧米の論者からは国際関係理論の多様化や欧米中心の理論の批判的検討を促すものとして歓迎する議論もあるが，その多くは概して批判的である。すなわち，中国独自の国際関係理論を提示しようとするあまり，中国と欧米との二項対立の図式に自ら陥り²⁾，古代の思想や歴史を都合よくつまみ食いして選択的に活用する³⁾一方で，欧米の国際関係論については規範論と実体論とを混同して批判している⁴⁾。また，中国学派の理論は分析枠組みというよりは，中国の国益と一党独裁システムを擁護し促進するための行動規範や指針だと評価すべきであり⁵⁾，習近平政権による大国外交の正当化⁶⁾や，アメリカ主導の自由主義的国際秩序に対する代替ビジョンの提示⁷⁾，かつての冊封体制のような中国を中心とするハブ・アンド・スポーク型国

* 和歌山大学経済学部准教授

1) Amitav Acharya, "Global International Relations (IR) and Regional Worlds: A New Agenda for International Studies," *International Studies Quarterly*, 58:4, 2014

2) Hun Joon Kim, "Will IR Theory with Chinese Characteristics Be a Powerful Alternative?," *The Chinese Journal of International Politics*, 9:1, 2016; Nele Noesselt, "Is There a "Chinese School" of IR?," *GIGA WP 188*, GIGA Institute of Asian Studies, 2012

3) Suisheng Zhao, "Reconstruction of Chinese History for a Peaceful Rise: China's Reliance on Selective Historical Details & Tianxia May Not Reassure Its Neighbors," *Eurasia Review*, June 13, 2017

4) 毛里和子『現代中国外交』岩波書店，2018年。

際関係の理論化⁸⁾をめざすものであるという指摘もある。理論的にも、議論の素材が中国の古代史に限定されており、東アジア以外の地域への適用可能性にも疑問符が付されるなど、まだ独自の体系を形成できていないという評価がある⁹⁾。

本稿では、中国学派の国際関係論をめぐるこのような議論の状況を踏まえ、まずは中国学派の代表的な論者の議論を取り上げて検討し、最後にそれらの議論の共通点を批判的に分析する。中国学派の代表的な提起は、政治的リーダーシップや指導者の道徳を重視する閻学通 (Yan Xuetong) の道義的現実主義、他者との関係の維持や発展を重視する関係的アクターを議論の出発点とする秦亚青 (Qin Yaqing) の関係的ガバナンス論、古代中国の世界秩序は多様性と調和を両立させた「天下 (Tianxia)」であったとする趙汀陽 (Zhao Tingyang) の天下論である。これらの提起はそれぞれが、民主主義国家に対する権威主義国家、合理的アクターによるルールに基づくガバナンスに対する関係的ガバナンス、ウェストファリアシステムに対する天下システムの優位という二項対立の図式に容易に落とし込まれる内容を持ち、それがゆえに建設的な議論を困難にしている。3人の議論は歴史の「出発点」における国家や社会、文明の始まりの姿を理想化し、それらの理想化された姿に中国独自の国際関係論の理論的基盤を求めようとしている点で共通している¹⁰⁾。このような意味において、中国学派の議論は中国的特色のある啓蒙主義もしくは例外主義、あるいは「始まりの国際関係論」として特徴づけることができるものと考えられる。以下では各論者の議論を順番に検討したうえで、このような問題を生み出す背景や方法論的問題点を指摘し、最後に若干の理論的な提起を行いたい。

II 道義的現実主義

本節では、閻学通の道義的現実主義を検討する。閻は1952年に生まれ、1992年にカリフォルニア大学で政治学の博士号を取得したのち、中国の精華大学で研究グループを組織し、「中国古代の政治思想と現代の国際関係理論を結び付け、現実の国際政治現象を解釈¹¹⁾」する精華アプローチを提起した。関心の焦点はアメリカから中国への覇権移行論や中国の覇権戦略にあるが、普遍的な理論の構築をめざすべきだという立場である¹²⁾。最初に国際的な評価を受けた著作では、荀子ら7名

5) Nele Noesselt, "Revisiting the Debate on Constructing a Theory of International Relations with Chinese Characteristics," *The China Quarterly*, 222, 2015

6) Nadège Rolland, "China's Vision for a New World Order," *NBR Special Report*, 83, National Bureau of Asian Research, 2020

7) Stephen Smith, "World Order with Chinese Characteristics: The Development of Chinese IR and Implications for Chinese Foreign Policy," Paper Prepared for the 2017 CPSA Conference, 2017

8) Salvatore Babones, "Taking China Seriously: Relationality, Tianxia, and the 'Chinese School' of International Relations," September 2017

9) Amitav Acharya, "From Heaven to Earth: 'Cultural Idealism' and 'Moral Realism' as Chinese Contributions to Global International Relations," *The Chinese Journal of International Politics*, 12:4, 2019

10) 中国の独自性を主張するために欧米を固有の他者として捉え、歴史を恣意的に取捨選択する選択的本質主義、あるいは中国例外主義であるとする指摘もある。Feng Zhang, "The Rise of Chinese Exceptionalism in International Relations," *European Journal of International Relations*, 19:2, 2011

11) 閻学通 (宋寧而, 姜春潔訳) 『世界権力の移行——中国の道義的現実主義の道』晃洋書房, 2020年。

の戦国・春秋期の思想家と『戦国策』を分類・整理して、そこから現代の国際問題への中国的な解決策を見出そうとした¹³⁾。以下では、政治指導者の資質や道徳を重視する閩の道義的現実主義の概要を、①政治的決定論、②国際構造の階層性、③国際システムの転換と国際規範の役割、④政治的パワーと戦略イノベーションの重要性、という4つの構成要素に分けて検討していく¹⁴⁾。

1 政治的決定論

道義的現実主義の中心的なテーマは覇権移行論、すなわち、台頭国がどのようにして主導国に取って代わるのかという問題である。閩によれば、国家のパワーは政治、文化、軍事、経済の4つの要素から構成されるが、政治的パワーは国家の指導者によって操作可能なパワーであるのに対し、残りの3つは操作されるパワーにすぎない。ゆえに、軍事や経済などの操作されるパワーを重視する構造的現実主義とは異なり、道義的現実主義では政治的パワーが国力増進のカギとなる。つまり、主導国から台頭国への覇権の移行は、それぞれの国が選択する政治的リーダーシップや戦略に左右される。

道義的現実主義では、国家の戦略はその道徳、つまり政治指導者の戦略的選好によって4つの類型に分けられる。国家の道徳は国益を守る責任、国際規範を实践する義務、同盟国からの戦略的信頼に関わる。指導者の戦略的選好には、①紛争の回避をめざす無為型、②経済的利益の追求を重視する現状維持型、③国際的支持の拡大をめざす積極型、④軍事拡張戦略を追求する闘争型の4つがある。

このように、道義的現実主義は国際関係における国家の戦略や指導者のリーダーシップの役割を重視する点で政治的決定論といえる。主導国の国際的なリーダーシップには、①道義を一貫して遵守する王権、②二重基準、すなわち同盟国に対しては道徳的にふるまい、敵対国に対しては実力に応じてふるまう覇権、③自国の実力に基づいて行動を決める強権の3つの類型がある。これらのリーダーシップ類型が主導国と台頭国との相対的国力を変化させ、その変化が各国との国際的な相互作用を通じて国際規範を変化させ、覇権の交代が起こるとする。

2 国際構造の階層性

道義的現実主義は国際関係を階層的なものとして捉える。国家は国力に応じて、①グローバルな実務を主導する主導国、②主導国との格差が縮小しつつある台頭国、③サブ地域内の実務を主導する地域大国、④実務を主導する能力のない小国の4つの類型がある。これらのうち、主導国と台頭国、地域大国は国際システムの主導権を戦略的利益とみなすが、小国は自国の生存を優先する。つまり、秩序や規範の構築や維持は大国の戦略的利益にすぎず、弱国には外交がない。

このような階層的な国際関係における台頭国の課題は他の国々との戦略的信頼関係の構築である。台頭国を中心とする新たな国際秩序が長期的に維持されるためには、新たな主導国が自らの国

12) B. Creutzfeldt, "Theory Talk #51: Yan Xuetong on Chinese Realism, the Tsinghua School of International Relations, and the Impossibility of Harmony", *Theory Talks*, 51, 2012

13) Yan Xuetong ed., *Ancient Chinese Thought, Modern Chinese Power*, Princeton University Press, 2011

14) 以下の議論は主に次の著書に基づく。Yan Xuetong, *Leadership and the Rise of Great Powers*, Princeton University Press, 2019; 閩学通前掲書。

国際規範を遵守するであろうという他国からの戦略的信頼が不可欠となる。ゆえに、新たな国際規範を実現させる政治的リーダーシップが重要であるということになる。

3 国際システムの転換と国際的価値規範

道義的現実主義では、国際システムはアクターと国際構造と国際規範の組み合わせによって特徴づけられる。近代においては国際システムの主要アクターは主権国家であり、国際構造とは国際関係における勢力配置、すなわち一極であるのか二極なのか、多極であるのかという問題、国際規範については、第2次大戦以降は国連憲章もしくはリベラリズムであるとする。これら3つの要素がすべて変化すれば国際システムは不可避免的に変化するが、3つのうち2つが変化するだけでもシステム変化の可能性は高い。1945年以降に変化したのは国際構造のみであり、国際システム全体は変化していない。

このように、国際構造は国際規範よりも速く変化し、国際規範はアクターよりも速く変化する。したがって、国際システムの変化とは、通常の場合、国際構造と国際規範の変化によって発生する。閻は、国際的な勢力配置と規範の変化を起こす決定的な要因は台頭国の政治的リーダーシップであると強調する。

では、覇権国であるアメリカのリベラリズムに対し、中国にはどのような価値規範があるのだろうか。閻によれば、リベラリズムの「平等・民主・自由」に対し、中国には「仁・義・礼」という規範がある。仁とは弱者に対する寛容、義とは公正で適切な行動、礼は倫理に基づく規範や慣習の実践を意味する。欧米の価値規範である法は不法行為を事後的に罰するのに対し、不法行為を事前に抑制するのが礼である。こうした対比を踏まえて、閻はこれら2つの規範を組み合わせた「公正・正義・文明」からなる道義的価値観を提起する¹⁵⁾。道義的価値観では、単なる平等は弱者や小国に不利であるため仁を踏まえた公正に、民主主義は必ずしも正しい結果を保証しないため義を組み合わせた正義に置き換えるべきだとされる。また、自由は秩序との間の緊張関係を克服するために礼を踏まえた文明に置き換え、覇権国と台頭国との主導権争いも文明の規範にしたがって平和的方法で進めるべきである。

このように、道義的価値観は自由主義諸国にも受け入れ可能であると同時に、小国にとってはリベラリズムよりも望ましい規範であるため、リベラリズムに対して優位に立つ。したがって、中国は近代化された王権国として、国内政治と国際社会の両方で一貫して道義的価値観を追求すべきであるとされる。

4 中国の台頭戦略

以上の議論を踏まえ、最後に道義的現実主義による中国の台頭戦略をまとめる。それによれば、大戦略の核心はイノベーションにあり、時代や地理的位置に応じた全く新しい戦略を創造的に構想しなければならない。今日の国際関係、とりわけ米中関係では核抑止が成立しており、米中戦争の可能性はほとんどない。また、米中の対立はイデオロギー対立ではなく国際的影響力や地位に関わる対立である。他方、経済のグローバル化と科学技術の急速な発展によって富の源泉は高度な科学

15) Yan Xuetong, "Chinese Values vs. Liberalism: What Ideology Will Shape the International Normative Order?", *The Chinese Journal of International Politics*, 11:1, 2018

技術となり、非伝統的安全保障問題の解決が国際社会の重要な課題となっている。

高度な科学技術を通じた経済的繁栄を達成するためには政治力の強化が求められる。具体的には制度の革新能力を備えた政治家と、管理の革新能力を備えた官僚が不可欠で、改革や革新を進められる優秀な人材を登用するためには、選出・登用の仕組みの改革も続けていく必要がある。強力な政治力を備えた国家の指導によって改革に反対する国内の諸勢力を抑え、国力を強化して主導国に追いつき追い抜くことが国家戦略の要諦である。

他方、外交戦略の核心は諸外国との戦略的信頼の強化である。そのためには第一に、中国はこれまでの非同盟政策を転換して中小国に安全保障を提供し、周辺諸国とは運命共同体を構築する。第二に、大国外交への転換を進め、これまでのような国際摩擦の回避から、実力に応じた能動的な対応によって戦略的チャンスを作り出し、自国に好適な国際環境を創造すべきだとする。

5 評価

閻学通の道義的現実主義は、中国古典の検討から「政治の主導性」や「大国の戦略的利益は国際規範の構築や維持、すなわち道義的外交にある」などの独自の主張を引き出し、現代中国の外交戦略に提言するという体系的な理論である。また、核抑止が機能しグローバル化が進む今日の国際関係においては科学技術こそが国家戦略の要になるという提起にも一定の説得力がある。しかし、その主張には以下のような問題もある。

第一に、その政治決定論は権威主義国家の事実上の擁護論になっているという点である。閻によれば、2008年の世界金融危機以降に顕著となったアメリカの相対的衰退と中国の台頭は政治的リーダーシップの優劣による。直接的には危機に対応するための金融・財政政策の巧緻の差だが、より根本的には政治改革に反対する利益集団を退けて改革を進められるか否かだという¹⁶⁾。しかし、閻の議論では国家は常に正しい改革を認識でき、問題はそれを企業や社会に押しつけられるのかどうかという点に矮小化されている。このような議論は国家から自立した市民社会や自由な経済活動の存在しない権威主義国に最もよくあてはまるのではないか。また、社会に対する国家の強さのみを問題にしているが、逆に、国家が自らの政治的目的で経済の活力を圧殺する「専横のリヴァイアサン¹⁷⁾」となる可能性を無視しているのではないか。

第二に、歴史や思想の選択的・恣意的な取捨選択という研究方法の問題がある。閻の精華アプローチでは現代の国際問題を解決するために古代の思想を分析しているが、その際に取り上げられるのは主に儒教であり、儒教の国政論に基づき王権的な外交が提起される。しかし、孫子や呉子などの軍事戦略論は看過され、秦の構築した総動員体制、敵の殲滅や完全な占領といった歴史的現実も触れられない¹⁸⁾。

こうした一面性に加え、古代思想の意図や文脈の曲解という問題もある。閻の取り上げた諸子百家の議論は、国内の統治と対外政策とを区別しない一般的な統治術である。とりわけ、彼の重視す

16) Yan, *Leadership and the Rise of Great Powers*

17) ダロン・アセモグル、ジェイムズ・A・ロビンソン（櫻井祐子訳）『自由の命運——国家、社会、そして狭い回廊』早川書房、2020年。

18) Victoria Tin-bor Hui, "History and Thought in China's Traditions," *Journal of Chinese Political Science*, 17, 2012; Victoria Tin-bor Hui, "Building Castles in the Sand: A Review of Ancient Chinese Thought, Modern Chinese Power," *The Chinese Journal of International Politics*, 5, 2012

る荀子の性悪説や社会規範論は国内社会の統治論として提起されている。しかし、閻は諸子百家の議論を無媒介に国際政治の議論に適用している¹⁹⁾。さらに言えば、近代社会においては国内社会と国際社会とは区別され、それぞれが別の原理によって支配されていると考えられているはずである。道義的現実主義に見られる国内社会と国際社会との混同は、中国では法の支配や個人主義などの欧米的近代が成立していないことを暗に示しているのかもしれない。

第三に、道徳についての道具的理解の問題である。道義的現実主義における道徳とは、国益を最大化するために選択される国家の手段に過ぎない²⁰⁾。あくまでも覇権国との対抗関係のなかで、パワーの劣る台頭国が他国の協力を引き出して自国のパワー不足を補うための道具だとみている。これに対し、これまでの国際政治学における道徳とは、あるべき国際社会や平和を実現するための原理であり、そうした理想と国益との緊張関係こそが問題とされてきた²¹⁾。しかし、閻学通の道徳論においては公正や正義、文明といった独自の理念が具体的に議論されることもなく、リベラリズムに対抗し乗り越えるための選択肢として示されるだけである。中国的な道義の内容を明確にすることもなしにリベラリズムに対置し、外交の手段として活用すべきであるという態度それ自体がまさに道具主義であり、そのような態度をとる理由は、中国を本来的に道徳的存在とみなしているからだとする指摘もある²²⁾。そうだとすれば、中国はなぜ、自らが近隣諸国から脅威とみなされているのかも理解できないし²³⁾、道義を道具主義的に活用しつつ自国の利益を追求すれば、かえって周辺国の疑念や反発を生み出すことも予測できないのではないか²⁴⁾。

Ⅲ 関係的ガバナンス論

本節では秦亜青の関係的ガバナンス論を検討する。秦亜青は1953年に生まれ、ミズーリ大学コロンビア校で政治学の博士学位を取得している。秦は長年、中国の歴史や思想・哲学の成果に基づく中国独自の国際関係論の構築を提唱し自ら推進してきた中国学派の中心的な論者の一人である²⁵⁾。秦によれば、社会科学の理論は一定の普遍性を持つべきだが、その起源をたどれば特定の文化的共同体における長年の習慣から生まれ、そのアクターによって蓄積された地域性を刻印されている。秦はこうした観点から欧米的な個人主義社会と中国的な関係主義社会とを対置させ、中国独

19) Zhang Feng, "The Tsinghua Approach and the Inception of Chinese Theories of International Relations", *The Chinese Journal of International Politics*, 5, 2012

20) Acharya, "From Heaven to Earth"

21) ハンス・J・モーゲンソー（原彬久監訳）『国際政治——権力と平和』岩波文庫、2013年。

22) カニンガム＝クロスとキャラハンによれば、中国の知識人は世界の発展の論理を正しく理解できれば中国の抱える全ての問題を解決できると考えるため、中国が何であるかよりも、どうあるべきかということに関心を集中しがちである。彼らはこうした知的態度を認識論的楽観主義と名づけている。Linsay Cunningham-Cross and William A. Callahan, "Ancient Chinese Power, Modern Chinese Thought," *The Chinese Journal of International Politics*, 4, 2011

23) Gideon Rachman, "A test of will," *Financial Times*, July 30, 2011

24) エドワード・ルトワック（奥山真司監訳）『自滅する中国——なぜ世界帝国になれないのか』芙蓉書房出版、2013年。

25) Qin Yaqing, "Why Is There No Chinese International Relations Theory?," *International Relations of the Asia-Pacific*, 7:3, 2007

自の国際関係論の構築をめざしてきた。他方、個人主義にも関係主義にもそれぞれの長所・短所があり、今後はこれら2つの社会の仕組みを補完的に組み合わせる必要があるとも述べている²⁶⁾。以下では、秦の議論を①社会理論と文化的共同体の役割、②関係性の弁証法、③関係的ガバナンス論の3つの論点に整理して概観する²⁷⁾。

1 社会理論と文化的共同体の役割

秦によれば、社会理論はその起源となる文化的共同体の特徴を刻印されている。社会理論の出発点となる「硬い中核」は現実社会を認識する「物質的要素」と、認識した現実を意味づけ理解し概念化する「形而上学的要素」とからなる。形而上学的要素は文化的共同体の「背景的知識」によって形成される。背景的知識とは、共同体内での日々の実践によって自然に形成されてきた曖昧で無意識的な知識のことである²⁸⁾。他方、個々の文化的共同体はそれぞれの背景的知識で区別される。では、欧米社会と中国社会の背景的知識とはそれぞれどのようなものであろうか。

欧米の国際関係論の背景的知識は存在論的個人主義と認識論的合理主義である。これらの背景的知識では、世界は独立した実体と構造的枠組みからなり、個々の実体は構造の中で合理的に行動するとされる。このような背景的知識を共有しているがゆえに、リアリズムやリベラリズム、コンストラクティビズムなどの欧米の主要な国際関係論の間の論争は、最終的には融和的な関係に収束する。秦は、欧米の理論家はこうした共通の背景的知識の存在に無自覚であるとする。

これに対し、中国の社会理論は儒教的共同体の長年の実践に埋め込まれた独自の背景的知識によって欧米社会からは区別される。中国の背景的知識においては、アクターは自らを取り巻く関係のなかに埋め込まれ、相互依存的な関係にある。このような関係は常に変動の過程にあり、ゆえにその中においてのみ存在しうるアクターも固定的な存在ではありえず、恒常的な再構成の過程にある。

2 関係性の弁証法

秦はヘーゲルの弁証法と中国の中庸の弁証法（陰陽論）とを対比し、欧米と中国それぞれの形而上学的存在論の違いを分析している。ヘーゲルの弁証法では、形式論理学に基づき対象を明確なカテゴリーに基づき分類し、その本質と属性とを定義づけたうえで、対象同士の矛盾や対立とその解消によって変化を説明しようとする。ヘーゲルの弁証法の世界では、自己は否定的あるいは敵対的な他者の存在を前提としており、我々と他者とは相互排他的な関係にある。

これに対し中庸の弁証法では、①2つの相互作用する対象は内在的に包含され（包含性）、②2つの対象は相互補完的で動的な均衡関係にあり（補完性）、③世界はすべての相違を適切に調整して調和に向かう恒常的なプロセスにある（調和）とされる。このように、中庸の弁証法の世界観をヘーゲルの弁証法と比べると、前者はより秩序志向で進化的で漸進的かつ保守的であり、調和の維

26) B. Creutzfeldt, "Theory Talk #45: Qin Yaqing on Rules vs Relations, Drinking Coffee and Tea, and a Chinese Approach to Global Governance", *Theory Talks*, 45, 2012

27) 以下の整理は主に秦の著書 Qin Yaqing, *A Relational Theory of World Politics*, Cambridge University Press, 2018 に基づく。

28) Yaqing Qin, "A Multiverse of Knowledge: Cultures and IR Theories", *The Chinese Journal of International Politics*, 11:4, 2018

持を志向している。

秦は中庸の弁証法をベースに関係主義社会におけるアクターやその相互関係を理論化している。関係主義社会のアクターは特定の他者との関係に位置づけられることで初めて確立する自我なき自己 (selfless self) である。こうした関係的アクターは、アクターを中心に (中心に位置するアクターとの) 親密性に従って同心円状に広がる関係サークルの中に存在している。すなわち、関係サークルとは関係的アクターの関係性の総和である。また、関係的アクターは自らの関係サークルの操作を通じて自己の目的を実現しようとする一方で、その利益や選好は固定的ではなく、むしろ関係サークルの変化に伴って変化する。ゆえに、それぞれの関係の管理こそが関係的アクターの最も重要な技能となる。関係的アクターは、自らの関係サークルにおける同質性の実現と異質性の尊重によって関係を管理する。これに対し、欧米の個人主義社会では同質性が関係管理の前提となる。

3 関係的ガバナンス

秦によれば、中国のような関係主義社会では、アクターのパワーはアクターが所有するのではなくアクターが関係に所属することで生じる。欧米社会では、パワーとはアクターが所有するエージェントのパワーか、非人格的な構造に帰属する構造的パワーに大別される。これに対し、関係主義社会におけるパワーとは関係そのものから生じ、その中にいるアクターによって共同所有され、利用を通じて維持され増大する関係のパワーである。

したがって、欧米社会における代表的なガバナンスは、合理的アクターを対象に、ルールや制度を通じてアクターの行動を外的に強制する「ルールに基づくガバナンス」である。ルールに基づくガバナンスにおいては、ルールはアクターの利己主義的な本質を変化させず、アクター間に信頼が成立しない。他方、中国に伝統的な関係的ガバナンスでは、アクター間の関係の調整を通じて共同体の複雑な関係を管理する。その中では、アクターが互惠的かつ協調的に行動するようになるため相互の信頼も強化される²⁹⁾。

ただし、ルールに基づくガバナンスと関係的ガバナンスとの関係は相互補完的である。秦によれば、ルールを確立するには行政コストが必要となるため、経済発展の初期段階にある途上国や中小企業では関係的ガバナンスの方が適している。しかし、企業や社会の規模が巨大になればルール履行のための相対的成本は低下し、構成メンバーの自己規律や自己抑制を求める関係的ガバナンスの機能不全であるメンバー間のもたれあいや腐敗が目立つようになる。したがって、先進国や大企業ではルールに基づくガバナンスの方が適している³⁰⁾。とはいえ、秦は、ルールに基づくガバナンスは多くの人々が人間関係を利用して法を潜り抜けようとする中国のような社会では機能しないと述べている³¹⁾。

29) Qin Yaqing, "A Relational Theory of World Politics," *International Studies Review*, 18, 2016

30) Qin Yaqing, "Rule, Rules and Relations: Towards a Synthetic Approach to Governance", *The Chinese Journal of International Politics*, 4:2, 2011

31) B. Creutzfeldt, *op.cit.*

4 評価

秦亜青は、欧米は個人主義の社会、中国は関係主義の社会であると対置したうえで、リアリズムやリベラリズムなどの欧米の主要な国際関係論は個人主義や合理主義、つまり合理的アクターとしての国家を出発点にしている点で共通しているとして批判しつつ、関係主義に基づく中国独自の国際関係論を構築しようとした。認識論や存在論にまで立ち入った議論を提示することで、関係的ガバナンス論は国際関係論の関係論的転回 (relational turn)³²⁾における有力な学説として位置づけられ、グローバル国際関係論の論者との共同研究も活発に進められている³³⁾。

欧米の関係論に対し、中国学派はその不徹底性を批判し、調和と長期的利益を重視する中国外交と、短期的な自己利益を追求する欧米外交とを対置しようとする³⁴⁾。例えば、秦はジャクソンとネクソンの関係論的国家論に対し、結局のところ国家を構成する関係を実体同士の関係だと捉えている点で不十分であり、また、実体化のプロセス、すなわち国家形成のプロセスのみを理論化しているにすぎないと批判している³⁵⁾。

しかし、秦の議論には欧米の国際関係論との形而上学的な二項対立の構図に囚われ、中国社会の関係性的側面、さらに言えば儒教的な性格を過度に強調する問題があるのではないか。実際、秦も「我々は文化本質主義ではない。合理性は想像上の西欧の実践共同体に固有だと考えないし、それがそのような共同体を完全に包含しているとも主張しない。…関係性も中国の共同体の伝統を完全に包含していない³⁶⁾」と述べ、関係性の理論は中国社会の一側面をモデル化した議論にすぎないと認めている。

この点について、中国の社会学者である翟学偉は、欧米の社会学におけるネットワークや社会関

32) 関係論的転回とは、社会学や歴史社会学、国際関係論における理論的潮流であり、アクターや国家などの理論の基礎単位を所与の前提とせず、それらの実体を取り巻く諸勢力の戦略や関係との相互作用によって動的に構成される場としてみる立場から、それぞれの理論を形而上学のレベルで見直そうとする。代表的な議論としてはさしあたり以下を参照されたい。ボブ・ジェソップ (中谷義和訳)『国家権力——戦略-関係アプローチ』お茶の水書房、2009年。Mustafa Emirbayer, “Manifesto for a Relational Sociology,” *American Journal of Sociology*, 103:2, 1997; Patrick Thaddeus Jackson and Daniel H. Nexon, “Relations before States: Substance, Process and the Study of World Politics,” *European Journal of International Relations*, 5:3, 1999; Tamara Townsell, Amaya Querejazu Escobari, Giorgio Shani, Navnita Chadha Behera, Jarrad Reddekop and Arlene Tickner, “Recrafting International Relations through Relationality,” *E-International Relations*, January 8, 2019

33) 例えば、Astrid H. M. Nordin, Graham M. Smith, Raoul Bunskoek, Chiung-chiu Huang, Yih-jye (Jay) Hwang, Patrick Thaddeus Jackson, Emilian Kavalski, L. H. M. Ling (posthumously), Leigh Martindale, Mari Nakamura, Daniel Nexon, Laura Premack, Yaqing Qin, Chih-yu Shih, David Tyfield, Emma Williams & Marysia Zalewski, “Towards Global Relational Theorizing: A Dialogue between Sinophone and Anglophone Scholarship on Relationalism,” *Cambridge Review of International Affairs*, 32:5, 2019. 同誌は国際関係論の関係論的転回をテーマとする論文集である。

34) Emilian Kavalski, “Guanxi or What Is the Chinese for Relational Theory of World Politics,” *International Relations of the Asia-Pacific*, 18:3, 2018; Zhao Tingyang, “All-Under-Heaven and Methodological Relationism: An Old Story and New World Peace,” Fred Dallmayr and Zhao Tingyang, *Contemporary Chinese Political Thought: Debates and Perspectives*, The University Press of Kentucky, 2012

35) Jackson and Nexon, *op.cit.* Qin, *A Relational Theory of World Politics*.

36) Yaqing Qin and Astrid H. M. Nordin, “Relationality and Rationality in Confucian and Western Traditions of Thought,” *Cambridge Review of International Affairs*, 32:5, 2019

係資本という概念は近代的個人の存在を前提とした分析のための概念であるのに対し、中国社会における「関係」ネットワークとは、前近代の農業社会における血縁や地縁に基づく生存のための人間関係を意味する歴史的な概念であるとする。社会関係資本における個人は所属するネットワークを自主的に選択し、それぞれのネットワークの参加資格やルールに従い、ネットワーク全体の公益の実現をめざそうとする。これに対し、中国人の所属する「関係」とは、自由に相手を選べない私的なネットワークであり、公式の組織やネットワークのルールや規範を無視して「関係」のある相手と自己の利益を追求しようとする。したがって、中国的な「関係」ネットワークは公益を追求する公式な組織やネットワークを機能不全に陥れるが、法治化や市場化、都市化、組織化、個人化などの近代的な潮流との間で矛盾を深めているという³⁷⁾。

また、中国には「朋友圈」や「グアンシ (guanxi)」などと言われる信頼を共有する排他的サークルが存在しており、こうしたサークルに所属するアクター同士の関係と異なるサークルに所属するアクター間の関係は全く異なると言われる。だとすれば、秦の関係的ガバナンス論は社会のすべてのアクターが規範や道徳を共有する同一のサークルに所属しているという非現実的な状態を前提していることになるのではないか³⁸⁾。

第二に、ルールに基づくガバナンス、あるいは法の支配についての一面的な理解の問題がある。秦は欧米のルールに基づくガバナンスについて、利己主義的なアクターを外的強制によって縛っているにすぎず、アクター間には信頼が存在しないと批判する。しかし、法の支配とは政治権力の暴走を防ぐために国家が統治する公的領域と自由な市民の活動を保障する私的領域とを分離し、法秩序によって国家権力を規制する枠組みである³⁹⁾。したがって、ルールに基づくガバナンスでは、市民の共同体から権力を移譲された国家が、彼らの権利を保障するために法秩序の枠内で法を執行する建前になっている。秦は、このような民主主義的正統性の存在や、政治権力を進んで国家に移譲できるほどの水準でアクター間の信頼が存在してことを看過しているのではないか。

第三に、関係的ガバナンス論は形而上学レベルの抽象的な議論をそのまま現実の国際関係の分析に適用するため、記述的・分析的議論ではなく規範論に陥っている⁴⁰⁾。例えば、中国の台頭は国際社会との相互作用を通じてそれぞれのアイデンティティを変化させ、その結果、平和的なプロセスになるとし⁴¹⁾、南シナ海問題については ASEAN 諸国との関係的ガバナンスによって相互に行動を自制して平和を実現できるとする⁴²⁾。いずれの分析も一面性を免れえていないのではないか。

37) 翟学偉 (朱安新, 小嶋華津子編訳) 『現代中国の社会と行動原理——関係・面子・権力』岩波書店, 2019 年。

38) 藤木剛康「マーシャルプランと一帯一路——アクターとガバナンスの観点から」『グローバル・ガバナンス』6, 2020 年。

39) 篠田英朗『「国家主権」という思想——国際的立憲主義への軌跡』勁草書房, 2012 年。

40) Wan-Ping Lin and Ching-Chang Chen, "Reflections on Confucian Cosmology and the Chinese School of IR," *E-International Relations*, March 3, 2020

41) Qin Yaqing, "International Society as a Process: Institutions, Identities and China's Peaceful Rise," *The Chinese Journal of International Politics*, 3, 2010

42) Qin Yaqing, "Rule, Rules and Relations: Towards a Synthetic Approach to Governance", *The Chinese Journal of International Politics*, 4:2, 2011

Ⅳ 天下論

趙汀陽は1961年に生まれ、中国人民大学と中国社会科学院を卒業して現在は中国社会科学院の教授職にある。閻や秦とは異なり留学経験はなく、サイードやハート、ネグリといった欧米の新マルクス主義やポストコロニアリズム思想、ポストモダン思想の影響を受けた新左派の哲学者だとみられていた⁴³⁾。2000年代半ばに周王朝期の国際システムを「天下」としてモデル化し、ローマの帝国システムや今日の国民国家からなる国連システムと並び立つ世界秩序であるとする一連の論文や著作を発表した。趙の議論は、中国の台頭とともに自信を深め、欧米の自由主義思想に対抗する体系的な政治思想を求めている中国の思想界を席卷した⁴⁴⁾。

その後、趙は2019年以降の著書では秦代に成立し清代まで続いた「大統一システム」を新たに提起し、議論の歴史的射程を大きく拡大している。そこで、以下では①天下システム、②大統一システム、③天下論の展望に分けて趙の議論を整理する⁴⁵⁾。

1 天下システム

趙によれば、周王朝の天下システムは世界政府と下位政府からなる開放的ネットワークであり、システム内の平和を乱さなければあらゆる国々に開放されていた。世界政府は下位政府の正統性を承認したり、下位政府間の紛争を調停することで、システムの正義や平和を維持した。このシステムの中で、下位政府は世界政府から独立して自国の経済や文化、規範の促進に責任を持つが、災害や侵略の際には世界政府の支援を受けた。また、住民には移住の自由があった。しかし、周のパワーは限定的であり、強大な下位政府であった秦に滅ぼされた。

このような歴史観に基づき、趙は、天下とは世界のすべてを調和的に包含する秩序であり、すべての土地、全人民の支持、世界機関（普遍的な政治システム）の三位一体からなるとした。趙によ

43) 新左派とは、主に欧米の新左翼の理論に依拠して欧米資本主義を批判しつつ、中国独自の社会主義モデルを批判する政治イデオロギーである。現代中国のイデオロギーについては以下で概観できる。馬立誠（本田善彦訳）『中国を動かす8つの思潮——その論争とダイナミズム』科学出版社東京、2013年。

44) 中国思想界における天下論の流行については、福嶋亮大『ハロー、ユーラシア——21世紀「中華」圏の政治思想』講談社、2021年。William A. Callahan, "Tianxia, Empire and the World: Soft Power and China's Foreign Policy Discourse in the 21st Century", *BICC Working Paper Series*, 1, 2007; Daniel Tobin, "How Xi Jinping's 'New Era' Should Have Ended U.S. Debate on Beijing's Ambitions," Hearing before the U.S.-China Economic and Security Review Commission, "A 'China Model?' Beijing Promotion of Alternative Global Norms and Standards," March 13, 2020. 天下論をめぐる論争については以下が詳しい。梁治平「想象'天下'——当代中国的意识形态建构」『思想』36, 2018 (Liang Zhiping, "Imaging 'Tianxia': Building Ideology in Contemporary China," 2018. Translation by David Ownby (https://www.readingthechinadream.com/liang-zhiping-tianxia-and-ideology.html))

45) 以下、天下システムについては Zhao Tingyang, "Rethinking Empire from a Chinese Concept 'All-under-Heaven (Tian-xia)'," *Social Identities*, 12:1, 2006; Zhao Tingyang, "A Political World Philosophy in Terms of All-under-Heaven (Tian-Xia)," *Diogenes*, 56:5, 2009; Zhao Tingyang, "Can This Ancient Chinese Philosophy Save Us from Global Chaos?," *The Washington Post*, February 7, 2018 を、大統一システムについては Zhao Tingyang, *Redefining a Philosophy for World Governance*, Palgrave, 2019; Zhao Tingyang, *All Under Heaven: The Tianxia System for a Possible World Order*, 2021 を主に参照した。

れば、今日の世界には政治的統一も普遍的なアイデンティティも存在しないため、それはまだ真の世界ではない。国連も国民国家の利益によって制約された組織にすぎず、世界の一体性を実現していない。国民国家による外部と内部、すなわち敵味方の区別が紛争の原因となるためだ。これに対し、天下は何者も排除しない、すべての政府を含む調和的かつ開放的なネットワークである。その中で下位政府は中央政府の政治的承認を要するが、経済や文化、価値観などの国内問題では独立の統治が認められており、世界の多様性と一体性が両立している。また、天下においては天子を始めとするエリートによる統治、選挙を通じた民意ではなく社会調査に基づく統治が進められるとする。

欧米の国民国家システムにおける価値観は個人的合理性を出発点としているのに対し、天下システムの価値観は関係的合理性に基づく。国民国家システムの価値序列は、個人を出発点として地域、そして国民国家に至る。個人は自己利益の最大化を追求し、その過程で紛争や対立を生み出す。これに対し、天下システムの価値序列は、政治的には天下から始まり国家を経て家族に至り、道徳的には家族を出発点として国家を経て天下に至る。天下システムでは他者との共存が前提とされ、ゆえに、道徳的には家族、政治的には天下が出発点となる。趙によれば、世界は不確実な可能性の過程であり、人間はそうした過程を克服したり征服したりするのではなく、積極的に関わり長期的な調和をめざす関係的合理性に従うべきであるとされる。

趙は、家族を出発点とする天下は最大の家族関係であり、あらゆるレベルでの調和的關係、すなわち社会秩序の維持をめざすものであるとした。ゆえに、天下と国民国家システムとは排他的関係にある。「欧米のシステムは競争と紛争から始まり、すべての政治的実体が個人から国民国家に向かって自己利益を最大化し、負けるまでは決して譲歩しないという前提で設計されている⁴⁶⁾」。趙はこのように、国民国家システムに対する天下システムの優位を主張している。

2 大統一システム

趙の天下システム論は大きな反響を呼んだが、様々な異論や反論も寄せられた。その中の一つに、中央政府が限定的な力しか持たないのに、どのようにして天下システムの平和的や調和を長期的に維持するのかという指摘があった。実際にも、周は当初は征服によって台頭したが、同盟諸国の利己的行動を支配できずに衰退した⁴⁷⁾。趙はこうした批判に対し、秦の武力による天下統一の世界ではなく国家の建設ではあるが、それは欧米の国民国家とは異なり、多文化で多民族だが統一した国家である大統一システムであり、天下システムの政治的遺伝子は残されたと主張するようになった。

大統一システムを形成する中心的概念は「焦点 (focal point)」あるいは「渦 (whirlpool)」である。趙によれば、中国文明圏における人々の活発な活動が周辺の部族を引き寄せる焦点・渦となり、そうした部族や民族の移動が周辺地域に持続的に拡大し、中国文明は無限の拡大サイクルを経験してきた。流入してきた多様な部族や民族は中国の文化や規範に教化され、中国の政治システムにおいてはすべての政治的勝者が民族的出自を問わず上位の精神的権威を継承できるようになった。こうして中国文明は強固な持続性を備え、多民族・多文化・世俗的・非宗教的な文明となった。

46) Zhao, "All-Under-Heaven and Methodological Relationism"

47) Feng Zhang, "The Tianxia System: World Order in a Chinese Utopia," *Global Asia*, 4:4, 2010

た。

ただし、大統一システムは中央政府の直接統治下にある地域にのみ適用された。趙は、漢王朝以降の統一王朝は大統一システムと周辺諸民族の統治システムとを併存させる複合システムであり、ゆえに漢以降今日に至るまで、中国は世界性を備えた国家であるとする。

3 展望

趙は、今日における監視技術の発展により、天下システムは国民国家システムに対してますます優位に立つようになると予想する。すなわち、欧米近代とは自己利益の最大化を当然とみなす危険な時代であり、個人を神格化する欧米個人主義はもはや行き詰まっている。これに対し、監視技術の発展は調和的な秩序である天下を実現する条件となる。というのは、人類の求める福祉を実現するためには完全なサービスを提供する必要があるが、そのためには人々の生活や思考を完全に管理する必要がある。こうして人々は先端技術による完璧なサービス享受するために進んで管理を求めるようになる。趙は、自由な民主主義を通じて人々は監視技術による新たな独裁を選択する可能性すらあるとする。このように、趙は技術支配あるいは人々の功利主義を通じた天下の実現を展望し、グローバルな技術システムの発展は天下システムの物的条件であると述べる。

4 評価

趙の天下論は中国の古代思想や歴史を巧みに取捨選択して組み合わせ、中国独自の「もう一つの国際秩序像」として、帝国や国民国家、主権国家システムなどの欧州近代の概念と対置した議論である。西欧近代の歴史が国内での階級闘争や革命、国外での権力政治や戦争、植民地主義などの暴力や破壊を伴っていたのに対し、中国の歴史は異民族の教化による統合、周辺国との繁栄と平和の共有などの道徳的優位を示すものであったとし、中国の思想界に大きな反響を引き起こした。大国化して覇権国アメリカとの対立を深める中で、西欧近代やアメリカの主張する民主主義や自由主義に対抗する理念や世界像を求めていた中国の知識人の要求をタイムリーに満たす議論であったといえよう。しかし、天下論の意義は中国人の求める理想や世界観を端的に示したということに集約されてしまうのではないか。

第一に、天下論はウォーラーステインの世界システム論と同様、非実証主義的かつ全体論的な理論であり、欧米とは本質的に異なる中国の形而上学を基礎に構築されている。中国人の世界観では、主体と客体を明確に区別するのではなく、個人は常に変動する世界の空間と時間の中に置かれているものとする⁴⁸⁾。だからこそ、戦争や平和ではなくそれらを超えた長期的な相互利益の関係である調和を求めるべきであるということになるが、中国的な世界観や文化を共有しない人々や国々とどのようにして調和的な天下を実現するのかについては議論されない。

具体的に敷衍すれば天下論には政策論がない⁴⁹⁾。天下を構成する世界政府や非排他的なネットワークはいかにして実現されるのだろうか。趙は「包含性」や「多様性と一体性の両立」などを天

48) Zhao, "All-Under-Heaven and Methodological Relationism"; Bettina Hüchel, "Theory of International Relations with Chinese Characteristics: The Tianxia System from a Metatheoretical Perspective," *Diskurs*, 8:2, 2012

49) Salvatore Babones, "'Redefining a Philosophy for World Governance" by Zhao Tingyang," *Asian Review of Books*, 28 February 2019

下の特徴として挙げるが、それらを実現するための具体的な提起がなければ、曖昧で融通無碍な美辞麗句にすぎないのではないか。このような曖昧さを逆手に取り、天下とは「誰が文明化され、誰が未開なのかを決める普遍的価値観による啓蒙化された領域」だと読みかえ、アメリカの覇権も生活様式や価値観による支配であり、アメリカ版の天下だとする議論すらある⁵⁰⁾。

第二に、こうした問題の背景の一つは規範論と実体論との恣意的な混同である。趙は欧米の国際関係の側面を取り上げ、中国思想の理想像によって批判する⁵¹⁾。戦争を「対等な国家間の武力衝突」に限定し、中国史における大規模な農民叛乱や異民族との紛争を無視し、周辺地域が天下への編入を自ら望んできたという誤解に基づいて議論を構築する⁵²⁾。この点については、中国史は統一王朝と多極システムとの交替の繰り返しであり、実際には多極システムの時期の方が技術革新や経済発展が進んだとする研究すらある⁵³⁾。このような歴史観からみれば、天下論は統一王朝期を恣意的に特別視しているにすぎない⁵⁴⁾。また、葛兆光 (Ge Zhaoguang) によれば、伝統中国における天下の概念には①内部と外部、②華夷、③上位者と下位者という3つの区別が含まれており、天下論者の主張は知識人の著作の中にしか存在しない歴史とは無関係の歴史 (ahistorical history) にすぎない⁵⁵⁾。他方で、主権国家システムにおける第1次大戦以降の国際法や国際条約、第2次大戦以降の国際機関の発展を看過し、そこには19世紀以来、何の変化もなかったかのようにみなして断罪する。しかし趙の議論では、そもそも中国自身が国家主権と領土的統一を最も声高に主張する典型的な主権国家であることも触れられない。

V おわりに

本稿では、中国学派の代表的な議論である閻学通の道義的現実主義、秦亚青の関係的ガバナンス論、趙汀陽の天下論を取り上げて批判的に検討した。その結果、これらの議論は中国独自の理論を構築して実践的な外交戦略を提起したり、中国外交を正当化しようとしたりするあまり、欧米対中国という二項対立の図式に陥っていることを明らかにした。

では、グローバル国際関係論の潮流がめざすように、ヨーロッパ史を起源とする国際関係論の相対化、あるいは「ウェストファリアの神話⁵⁶⁾」を克服するためには、中国学派の問題提起をどのように生かしたらよいのであろうか。これらは本稿の課題設定を越えた問題だが、以下、今後の検討

50) Salvatore Babones, "American Tianxia: When Chinese Philosophy Meets American Power," *Foreign Affairs*, June 22, 2017

51) Callahan, *op.cit.*

52) William A. Callahan, "Chinese Visions of World Order: Post-Hegemonic or New Hegemony?," *International Studies Review*, 10, 2008

53) Fei-Ling Wang, *The China Order: Centralia, World Empire and the Nature of Chinese Power*, Suny Press, 2017

54) Zhang, "The Rise of Chinese Exceptionalism"

55) Ge Zhaoguang, *op.cit.*

56) 「ウェストファリアの神話」については、山下範久、安高啓朗、芝崎厚士編『ウェストファリア史観を脱構築する——歴史記述としての国際関係論』ナカニシヤ出版、2016年、を参照されたい。同書によれば、ウェストファリアの神話とは①ウェストファリア条約によって近代西欧の国際秩序が確立したという歴史観、②現代国際関係の起源は近代西欧の国際関係にあるとする史観、③国際関係とは主権国家によるパワー・ポリティクスであるとする世界観をさす。

課題として二点提起しておきたい。

第一の課題は国内社会との関係をも含めた国家論の見直しである。本稿で検討した3人の論者の共通点の一つは国家論への関心の希薄さである。道義的現実主義の議論では、国家は単に国内の資源を動員して国家間対立に活用する存在として描かれた。また、関係的ガバナンス論や天下論のような関係論的な議論では、国家それ自体を実体として捉えるのではなく、儒教的な関係性や階層性に基づく国家間関係として分析しようとする⁵⁷⁾。これらの中国的な関係論の枠組みでは国家と社会は対立的に存在せず、家族から宗族を経て国家へと至る同心円状の関係の中に存在する⁵⁸⁾。これに対し、フクヤマやアセモグルら欧米の主要な論者は、秦帝国以来の中国の国家を政治権力が一元化された専制国家だとみなしている⁵⁹⁾。

しかし、清朝の崩壊以降の中国ではそうした伝統的な国家や社会関係は近代化の障害であるとして批判の対象となり、とりわけ毛沢東期の共産党政権はそれらの伝統を徹底して排撃した。ゆえに、中国の歴史や思想から学ぶためには、中国の伝統に回帰するだけではなく、それが清朝解体以降の近代化のプロセスを経てどのように変容したのかを検討する必要がある。そのためには、少なくとも法の支配や公共性、公私の区別といった欧米の国家と社会との関係の特徴づける理念が中国の近代化においてどのように受容され変質したのか、あるいは受容されなかったのかを理論的に検討する必要があるのではないか。

第二に、中国的な啓蒙主義ないしは例外主義の問題である。本稿では中国学派の議論を、制度や文化の理念的な違いを理論の出発点とする「始まりの国際関係論」として特徴づけて批判的に検討した。中国学派の議論ではなぜ、あるいはいかにして国家や社会、文明の始まりの姿が構成されたのかは不問に付されている⁶⁰⁾。また、中国は秦による統一の後、統一と統一による「調和」を優先し続けた社会であるが、そうした統一の内実、すなわち、経済社会のあり方や社会の規模・多様性、統一のための理念や仕組みも変化し続けた。したがって、統一の内実がどのように変化しあるいは再生されたのかを長期的な経路依存性の中に位置づけて検討すべきである⁶¹⁾。欧米の国際関係論と中国学派の議論の基本的なカテゴリーを中国史の歴史的变化の中において再評価することが、歴史のつまみ食いや二項対立の図式を克服するために求められている。

57) Salvatore Babones, "Taking China Seriously"

58) 翟前掲書。

59) フランシス・フクヤマ（会田弘継訳）『政治の起源——人類以前からフランス革命まで』講談社、2013年。フランシス・フクヤマ（会田弘継訳）『政治の衰退——フランス革命から民主主義の未来へ』講談社、2018年。アセモグル、ロビンソン前掲書。

60) 春秋戦国期の中国の国際関係と近代初期の欧州の国際関係を比較し、前者が秦による統一で終わったのに対し、後者が国家間の抑制と均衡に向かった歴史的条件を明らかにした研究として、Victoria Tin-bor Hui, *War and State Formation in Ancient China and Early Modern Europe*, Cambridge University Press, 2005

61) ボール・ピアソン（柏谷祐子監訳）『ポリティクス・イン・タイム——歴史・制度・社会分析』勁草書房、2010年。